新学術領域
「顔・身体学」主催

公開シンポジウム

パラリンピアンを迎えて

－顔身体学の観点からパラリンピックを考える－

東京オリンピック・パラリンピックが開催され、日本国内でのパラスポーツを取り巻く環境は大きく変化した。ルールや用具が工夫されたパラスポーツは障がいのあるなしに関わらず取り組むことができ、ユニバーサルな観点でも広がりを見せつつある一方で、義足の選手がオリンピックへの出場が認められず障害があることがスポーツにおいて不利なのか、有利なのか議論が生まれつつある。障害の有無、先天的・後天的な障害、トップスポーツとレクリエーションといった切り口をきっかけに、スポーツとは何か、障害とは何か、パラリンピックとは何かについて、顔身体学の観点から考察したい。

岩渕 幸洋
（東京 2020 パラリンピック日本代表）

川内 美彦
（東洋大学）

工藤 和俊
（東京大学）

大須 理英子
（早稲田大学）

前田 有香
（立教大学）

山口 真美
（中央大学）

河野 哲也
（立教大学）

参加費無料・要事前参加登録

定員上限あり（会場 180 名、オンライン 500 名）

会場：早稲田大学小野記念講堂
https://www.waseda.jp/culture/facility/ono/

オンライン参加あり

2022
7/30 土

ご参加登録は▶
こちらから！

公開シンポジウム

新学術領域「顔・身体学」主催

パラリンピアンを迎えて

—顔身体学の観点からパラリンピックを考える—

プログラム

17:30	オープニング・趣旨説明・登壇者紹介：河野哲也（司会・立教大学）
17:45	講演 1「環境とつながる身体」　：工藤和俊（東京大学）
18:10	講演 2「スポーツと平等を考える」　：川内美彦（東洋大学）
18:35	講演 3「パラスポーツの見方」　：岩渕幸洋（東京 2020 パラリンピック卓球日本代表）
19:00	総合討論
	指定討論者：大須理英子（早稲田大学）
	前田有香（立教大学）
20:00	クロージング：山口真美（領域代表・中央大学）

登壇者

岩渕　幸洋

先天性で両足首に障害を持ち、左足には装具を付けプレーをする。
中学一年時に部活動として卓球を始める。卓球を始めた当時は自分が障害者としての認識はなく、中学三年の時、卓球クラブのコーチの紹介でパラ卓球と出会う。最初はパラ卓球独特の戦術・技術に翻弄され全く勝てず、そこから自分の障害に合うスタイルを考え始め、高校三年時に国際大会初出場。大学四年時にリオデジャネイロパラリンピックに出場するも結果は惨敗。東京ではパラリンピック初勝利となる１勝を挙げるも混戦したリーグを勝ち抜くことができず予選リーグ敗退。パリでは雪辱を誓う。現在はプロ選手として活動。パリパラリンピックで金メダルを獲得し、パラスポーツの発展、魅力の発信を目標とする。

川内　美彦

東洋大学人間科学総合研究所客員研究員。アクセシビリティ研究所主宰。2018 年まで東洋大学教授。一級建築士。工学博士。だれにも使いやすく、安全な建物やまちづくりについて発言している。また「福祉」という視点ではなく、障害のある人の社会への関わりを権利として確立していく活動を展開している。2000 年「ロン・メイス２１世紀デザイン賞」受賞。
著書
『尊厳なきバリアフリー　『心・やさしさ・思いやり』に異議あり！』現代書館（2021/2）『ユニバーサル・デザインの仕組みをつくる』学芸出版社（2007/8）、『ユニバーサル・デザインーバリアフリーへの問いかけ』学芸出版社（2001/4）『バリア・フル・ニッポンー障害を持つアクセス専門家が見たまちづくり』現代書館（1996/11）ほか多数。

工藤　和俊

1998 年、東京大学大学院総合文化研究科生命環境科学系修了、博士（学術）取得。2002－2003 年、米国コネチカット大学知覚と行為の生態学研究センター客員研究員。東京大学大学院総合文化研究科助手・助教を経て、現在、同研究科准教授。身体運動の実技実践と認知神経科学・複雑系数理科学的アプローチを用いた研究を通じて、スポーツ、ダンス、音楽演奏等のパフォーマンスを支える「巧みさ」の解明を目指している。

大須　理英子　指定討論者

1996 年京都大学大学院文学研究科（心理学専攻）にて博士（文学）取得。ERATO 川人学習動態脳プロジェクト研究員、ATR 脳情報研究所主任研究員、同運動制御・機能回復研究室室長を経て、2015 年よりニールセン・カンパニー合同会社ニューロサイエンスディレクター、2017 年より早稲田大学人間科学学術院教授。認知神経科学、システム神経科学を専門とし、生体の運動制御や学習、ニューロリハビリテーションなどに取り組んでいる。

前田　有香　指定討論者

立教大学文学部研究助手・社会福祉研究所研究員、（一社）日本車いすラグビー連盟事業企画委員会企画部長、（一社）日本障害者カヌー協会副会長、パラスポーツエバンジェリスト。特別支援学校の教員を経て、大学院在学中にパラスポーツに出会い、（公財）日本財団パラリンピックサポートセンター推進戦略部プロジェクトリーダーとしてパラリンピック競技団体の組織基盤強化やパラスポーツの普及啓発活動等を担当。2020 年 4 月よりオイシックス・ラ・大地株式会社からの兼務出向として車いすラグビーの団体運営に携わる。研究では障害者のスポーツ参加における公平性—ケイパビリティ・アプローチによる検討など。渋谷のラジオ「渋谷の体育会」レギュラー出演中。

山口　真美　領域代表

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻終了後、ATR 人間情報通信研究所、福島大学生涯学習教育研究センターを経て、中央大学文学部心理学研究室教授。博士（人文科学）。日本赤ちゃん学会副理事長、日本顔学会・日本心理学会理事。新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現—」領域代表。著書に「こころと身体の心理学」（岩波ジュニア新書）、「自分の顔が好きですか？——「顔」の心理学」（岩波ジュニア新書）、「発達障害の素顔　脳の発達と視覚形成からのアプローチ」（講談社ブルーバックス）など。

河野　哲也　司会

立教大学文学部・教授、博士（哲学）慶応義塾大学。日本哲学会理事、日本学術会議連携委員。専門は、現代哲学と倫理学、近年は環境問題を扱った哲学を展開している。「こども哲学」を、未就学児から高校生まで対象として、全国の教育機関や図書館で実践している。
代表著作:『現象学的身体論と特別支援教育』（北大路書房、2015）、『境界の現象学：始原の海から流体の存在論へ』（筑摩選書、2014）、『人は語り続けるとき、考えていない：対話と思考の哲学』（岩波書店、2019）、『じぶんで考え じぶんで話せる：こどもを育てる哲学レッスン・増補版』（河出書房新社、2021）など。